

ジャック・ブローにおける翻訳の詩学と日本文学
—*Trois fois passera* にそいながら—

La poétique de la traduction chez Jacques Brault et
la littérature japonaise :
à la lumière de *Trois fois passera*

真田桂子
SANADA Keiko

はじめに

ジャック・ブロー (Jacques Brault, 1933-) ¹ は、現代ケベックを代表する詩人の一人である。1965年に刊行した第1詩集『回想』(*Mémoire*)で、自らの境遇と疎外されたケベコワの運命を重ね合わせた力強く叙情に満ちた詩を発表し、第一級の詩人としての評価を得る。その後、今日に至るまで多数の作品を発表し、カナダ総督文学賞、ジル＝コルベユ賞など数々の賞を受賞して、ガストン・ミロン (Gaston Miron, 1928-1996) とともにケベックの国民的な詩人として仰がれている。

ブローの作品を俯瞰するとき、注目すべきことの一つは、その文体のダイナミックな変遷にある。例えば、『回想』に収められている「亡き兄と祖国に捧げる組曲」(*Suite fraternelle*)は、ギリシャ・ローマの古典文学を彷彿とさせる長編叙事詩でケベック詩の古典とみなされている。シシリアの地で戦死した兄の運命を嘆き、異国に散った兄の姿とその復活を抑圧された故郷ケベックの再生の模索を重ね合わせて謳いあげた長詩で、幾重にも重なり合うメタファーやモチーフが絡み合い、力強く雄弁で表現力に富む作品となっている。しかしその後作風は一変し、1984年に発表された『はかない瞬間』(*Moments fragiles*, Brault, 1984)では、俳句や短歌など日本の詩歌を連想させる簡素で抑制された文体のうちに、さり気ない日常のかけがえのなさや、人生の哀感と人間への深い省察が切々と歌い込まれ、ブローの詩はかぎりなく沈黙へと近づこうとしているかのようなようである。ブロー自身、東洋文学に親し

み、とりわけ日本文学への深い関心を認めており、ブローの文体の変化を促した要因の一つには、まぎれもなく日本文学への傾倒とその影響があると考えられる。

一方、ブローの創作活動においてしばしば注目されることに、優れた翻訳家としての側面がある。この詩人はいくつもの英語圏の作品をフランス語へと翻訳し、翻訳を芸術の域にまで高めたと評価されている。例えば、1975年には、マーガレット・アットウッド (Margaret Atwood, 1939-) の詩を含む4人の英語圏作家の詩をフランス語へと翻訳し、ブロー自身の翻訳に関する省察も盛り込んだ『東西南北からの詩』 (*Poèmes des quatre côtés*) を出版し、1998年には、カナダ英語圏の著名な詩人E.D. プロジェット (Edouard D.Blodgett, 1935-2018) との共著『変容』 (*Transfiguration*, Brault, 1998) により、日本の連歌の形式に則り、英語とフランス語で相互に各自の作品を翻訳し合う創作翻訳詩とも呼びうる異色の作品を発表し大きな反響を呼んだ。このように日本文学の影響は、ブローの翻訳作品においても顕著に表れているのである。

ブローのこうした側面は、すでに多くの識者によって研究がなされてきたが²、あくまでそれぞれ別個のテーマとして掘り下げられてきた。この論考では、ブローを翻訳へと突き動かすものが「翻訳の詩学」と呼びうる深い思索にもとづいていることを明らかにするとともに、一方で、それが日本文学への傾倒とどのように結びついているのかに注目し検証を行いたい。ここでは特に、日本文学についての省察が含まれたブロー独自の詩論ともいえる『三度通れば』 (*Trois fois passera*, 1981) を取り上げ、ブローの翻訳の詩学において、日本文学はどのような意味をもち、どのような表象として表れているかについて考察する。

1. ケベック文学と翻訳研究

今日、世界各地で多言語化や多文化の共存が伸展し、現代社会において翻訳は極めて重要で象徴的な役割を担っている。言うまでもなく英・仏二言語を公用語とするカナダにおいても、翻訳は政治的、社会的に極めて重要な役割を果たしてきた。とりわけケベックでは、圧倒的な多数派である英語系の隣人と、社会の多元化に伴い流入してきた多様な出自の移民たちとの共存のはざま、ケベコワは常にフランス系としてのアイデンティティの保持と再構築の必要にせまられてきた。このように言語的、文化的他者に取り巻かれ

たケベック社会において、翻訳は他者との交渉と文化交流のための欠くことのできない手段として隆盛を極めているが、文学においても「翻訳」³は様々な形で顕在化しケベック文学の独自性の形成に大きく寄与してきた。実際ケベックでは、翻訳行為ならびに翻訳文学に大きな影響を受けた作家が多数存在し、文学における「翻訳」は様々な角度から検証が進み、独自の「翻訳理論」も生み出されてきた。

例えば、このテーマに強い関心を寄せてきたケベックの批評家であるシェリー・シモン (Sherry Simon) は、『言語の交錯—ケベック文学における翻訳と文化』(*Le Trafic des langues-Traduction et culture dans la littérature québécoise*, Simon, 1994) において、ケベック文学は翻訳を研究・考察する上で、豊富な研究対象と理論を兼ね備えた稀有な土壌を提供していると指摘する⁴。特筆すべきこととして、シモンは翻訳についての考察を進める前提として、かつてヤコブソンが示した「違いの中の等価」(Jakobson, 1959) がもはや翻訳の定義ではなく、フォルカールが示唆する「逸脱からの創造」(Folkart, 2007) にこそ今日の翻訳の真価があると考え。そして、言語の生成や美学的効果、文化の交流、思想的政治的な力学の現われる、様々な意味での創造的な翻訳の効果を「翻訳の詩学」と呼び、ケベック文学において、それぞれの視点から翻訳のもつ美学的、創造的な効果に注目し、それらを作品に反映させている作家として、ブローを筆頭に、ニコル・ブrossard (Nicole Brossard)、A.M. クライン (Abraham Moses Klein)、レジーヌ・ロバン (Régine Robin)、マルコ・ミコーネ (Marco Micone) らを取り上げ詳細に分析を行なっている⁵。

2. ブローにおける「翻訳の詩学」

2.1. 「翻訳」と「否翻訳」

ジャック・ブローにとって翻訳とはどのような意味をもっているのか？この作家を翻訳へと駆り立てたのは何であったのだろうか？

すでにケベックにおいて、詩人、エッセイスト、批評家として知られていたブローが1975年に出版した『東西南北からの詩』は様々な意味において独特の構成をもつ異色の「翻訳詩集」である⁶。この本では、アラスカ出身の詩人ジョン・ヘインズ (John Haines)、オンタリオ州の出身で早世した女性詩人グウェンドリン・マキューエン (Gwendolyn MacEwen)、同じくトロント在住のカナダ英語圏の著名な作家マーガレット・アットウッド、そしてア

メリカの詩人で自由奔放な作風で知られる E・E・カミングス (Edward Estlin Cummings) ら 4 人の作品を取り上げ、それぞれ北：ヘインズ、東：マキューエン、西：アットウッド、南：カミングスの 4 つの章に分け、ブローがそれぞれの作家の英語の詩をフランス語に翻訳している。そして各章には、詩の翻訳に先立って、バルザックやネルーダなど古今東西の作家の象徴的な短文がエピグラフとして冠され、ブローの翻訳をめぐる省察の短いエッセイもつけ加えられている。また詩集としては比較的大判の B5 版で、随所にブロー自身によって描かれた水墨画が挿入された装丁となっており、手に取って読みだすと、それらが共鳴し合い、さながら詩と翻訳の迷宮に入り込んだかの印象を受ける。

しかしこの詩集においてとりわけ驚くべきことは、4 つの章には別のタイトルが記されており、それらはすべて「否翻訳」(Nontraduire) 1,2,3,4 と名付けられていることである。しかも、翻訳されたそれぞれの詩の元のタイトルは伏せられたままで、ブロー自身による後書きのなかで、はじめて翻訳された各々の詩の出典が明かされるという成り立ちになっている。つまりこの「翻訳詩集」では、いくつもの創造的な仕掛けによって、作品を読むうちに「翻訳」であることが限りなく曖昧になっていくのである。すなわちある言語によるオリジナルな作品があって、それが別の言語に「翻訳」されほぼ等価なものに置き換えられた過程などなかったかのように、それが翻訳なのか、創作なのか、さらに言えば、そこに刻まれた言葉が一体誰のものなのか分からなくなってしまうような、ある種の美的な倒錯による思索的な効果が生み出されているのである。

ブローにとって「翻訳」とは何であるのか、そして「否翻訳」とは何を意味するのか? 「翻訳」をめぐる省察において、ブローはまず『『オリジナル』なものがあるとの考え方には抵抗を感じる。いいや、翻訳によって複製されるということは断じてあり得ない』(Brault, 1975, p.33) と述べる。そしてブローは、「否翻訳」すなわち「翻訳にあらず」とは何であるかを例えば次のように説明している。

私は言語のはざまをたゆたう。視界を曇らせる霧のかかった言葉のはざまを。そして、他者のものではなく、私のものでもない文章がキアスムのように立ち現れる。私は宙づりになる。私は足場を失い、再び我に返る。私自身何も言うことはない。そして間テキストと呼ぶものが、「否翻訳」によって明らかにな

る。(Brault, 1975, p.50)

このように「否翻訳」とは、実はブローの翻訳の過程そのものを表していると思われ、ブローにとっての翻訳のイデオロギーそのものであったと考えられる。一方、ブローにおいて、不安定な言語のはざまにあって「翻訳」の異次元に身を置くことは、むしろ「啓示をもたらす特権的な場」(Simon, 1994, p.62)であったと考えられる。「言語の裂け目」「言語のはざまの違和」から突然もたらされる天啓、それはブローにあっては、「(言語の) はざまの見えない敷居に身をおき、自らの否定と肯定のあいだで揺れ動き、他者の遠くて近い声に耳を傾ける」(Brault, 1975, p.15) ことに他ならなかったのである。すなわちブローにおいて、まさに「翻訳」とは他者との対話であり、それにとどまらず「他者との繋がりをもたらすと同時に、新しい自己の構築をもたらす」(Simon, 1994, pp.61-62) ものであったと考えられる。

2.2. ブローにおける「翻訳の詩学」：言語と他者、沈黙の彼方へ

このような「翻訳」にブローを突き動かした要因は何であったのかだろうか。シェリー・シモンも指摘しているように (Simon, 2008)、1970年代のケベックはナショナリズムの気運に覆われ、フランス語を擁護し、英語は支配者の言語として遠ざけられる傾向にあった。作家や文学者の間でも、翻訳は必ずしも主要な関心事とはなり得ず、当時、アメリカの文化的侵略を象徴する英語で書かれた作品の翻訳に目を向けるものなどほとんどいなかった。そのような状況にもかかわらず、ブローはいち早く「翻訳」に注目し、『東西南北からの詩』を発表する。

おそらく、ブローを翻訳へと駆り立てた要因はその個人的な境遇とケベックの社会的、文化的な条件の双方にあると考えられる。モンリオールの市中の労働者階級に生まれたブローは、少年の頃を振り返り次のように回想している。

モンリオールの夏の朝、ローズモン街の街角の人気のない通りを思い出す。ふりそそぐ陽ざしの下、私は15歳だった。自分はもはや誰の子どもでもないと感じていた。私は貧しかった。とりわけ言語において。私には自らの悲嘆を言い表す言葉さえなかった。(Brault, 1989, p.40)

この述懐に見られるように、自らが依拠するものの不確定感、自らを表出する文学的言語の不在、すなわち母語であるフランス語に内在する疎外感、自らに固有の言語を求め、ブローを外部へと、他者の言語へと向かわせる動機となったと思われる。さらに英語に取り巻かれたケベックの状況もブローを翻訳へと向かわせる背景となった。こうした要因が、ブローを「翻訳の詩学」ともいえる境地へ導いたことを、作家は次のように語っている。

思いがけず、様々な地域、国の、様々な歴史的、社会的、文化的、象徴的沖積物に満ちた（文学作品という）水のなかを泳ぐうちに、私はむしろ孤独から深く癒され、我が家にいるかのように感じた。というのも、詩への情熱とともに、ケベコワであるという条件によって、私はあえて、存在の不安定感（*dépaysement*）という迂回をへて自らに帰還することを余儀なくされるようになっていた。肌の色の違いで差別されるように、言語において疎外され、私は日常的に、他者についての熟考を経て、自分自身と向き合い自己と新たな関係を築くようになった。「否翻訳」が必要だった理由がここにある。アメリカ大陸の英語に脅かされたかって？とんでもない。私はこの言語をくぐり抜けるだろう。この言語を通り抜けてはじめて、私は、私に固有の（未知の）言語にたどり着くであろう。この骨が折れる有益な回り道へて、私は他者のなかに溶け込み、そして他者は私のなかに姿をあらわすのだ。（Brault, 1989, p.212）

このように、「翻訳」すなわち「否翻訳」は、ブローにあっては、疎外された自己を、他者へと、別の言語へと、新たな自己の再構築を可能とする地平へと解き放つのである。

さらに注目すべきこととして、ブローの「否翻訳」が孕む言語のはざまから、もう一つの重要な側面が浮かび上がってくる。当初、言語のはざまから生まれ、作家のうちに響くのは、「荒々しい獣の叫びにも似た違和感をともなった言語」（Brault, 1975, p.32）であった。しかし、「否翻訳」に導かれた先に作家が出会うのは「荒々しい沈黙」であった。

テキストがもたらす荒々しい沈黙を飼いならすことはしまい。私を解放してくれるその違和感をおびた言語が、私自身の言語に入り込んでくるのをそのままにしておこう。[...] 私は自分自身の違和感を学ぶだろう。一つの夜からもう一つの夜へと変貌するなかで、私は私自身を翻訳されるがままにするだろう。私自身のなかにもたらされたと信じたテキストのなかに自らが運び込まれるが

ままにするだろう。今や私は、何も話さないがために話すのである。私の署名は私から逃れさっていく。(Brault, 1975, p.68)

そして「否翻訳」をめぐる省察の果てに見出した境地を、ブローは中国の賢人の言葉を借りて次のように表現している。「もし誰かが口にした言葉を奪ったとしても、泥棒と叫んではいけない。言葉は誰のものでもないのだから。沈黙とは反対に」(Brault, 1975, p.95)。

「翻訳」すなわち「否翻訳」は、作家を、言語において疎外された自己から解放し、他者へと、別の言語へと導き、新しい自己の構築を可能にする、荒々しい違和感をおびた沈黙をもたらすのである。そしてここで、「私たちは、この『否翻訳』の言語のはざまに新しい言語が生まれるのを聞く。それこそがまさに、『書く』ことそのものなのである」(Brault, 1975, p.50)。このように、この「翻訳」＝「否翻訳」の磁場こそがブローの創作の原点であり、ブローに固有の「翻訳の詩学」なのである。

3. *Trois fois passera*⁷ : 表象としての日本文学

すでに述べたように、ブローは日本文学から深い影響を受けた作品を数多く発表している。『はかない瞬間』(1984)や『変容』(1998)など、俳句や短歌など日本の詩歌に影響を受け、ブローの文体は大きく変化した。このようにブローの作品に日本文学の影響が顕著に現れ始めるのは、『東西南北からの詩』(1975)を発表した頃からである。すでにみたように、言語における疎外感はブローを世界の様々な地域の言語や文学へと導き開眼を促した。そのなかでも、日本文学はブローの文学に特に大きな影響を及ぼしたと考えられる。とりわけブローの「翻訳の詩学」を考える上で、日本文学はどのような意味をもつのであろうか。ここでは、日本文学がモチーフとなって表れた散文詩とエッセイを収めた作品である *Trois fois passera* (1981) にそいながら考察を行いたい。

Trois fois passera は、散文詩といえるような叙述のなかに、ブローの詩論とエッセイが混然一体となって書き込まれている幻想的な作品である。作品の構成は、「昼と夜」(Jour et Nuit) と題された詩、散文詩、エッセイを含む作品と、タイトルにある *Trois fois passera* と題されたエッセイが収録された作品との2部で構成されている。*Trois fois passera* はさらに3つに分かれており、

「手紙の断章」(Fragments d'une lettre)、「直後に」(L'instant d'après)、「かけらの詩学」(Une poésie en miettes)の3つのタイトルが冠された章立てとなっている。この作品では、随所に日本の風物や文化、日本文学をモチーフとする描写が立ち現れている。さらに装丁も、本のあちこちの頁に、それらのモチーフを喚起する写真と絵のコラージュ(セリヌ・フォルタン作)が挿入され、さながら美術書のような趣さえ備えている。

例えば、「昼と夜」では日本の案山子が登場する。また「直後に」では、小野小町がモチーフとして取り上げられ、「かけらの詩学」においては、西行や芭蕉が引用されている。ブローはそれぞれの風物や人物のイメージにそいながら、彼方と此処、過去と現代、日本とケベックなど、複数の時空が交錯し、虚と実が入り混じる夢幻的な世界を想起させ、散文詩といえるような文体で、自らの詩や創作についての省察を繰り返している。各所に挿入されているコラージュも、例えば、ケベックの住居の窓の風景に案山子が現われ、モントリオール大学の塔を映した写真と小野小町とおぼしき姿が重ね合わされ、日本の寺の伽藍からケベックの冬景色が垣間見えるのである。このようにブローが想起した夢幻の世界において、日本の風物や人物はさながら登場人物のように跳梁跋扈し、読者を異次元の世界に誘い込むのである。



図1

Collage de Célyne Fortin ©Les Éditions du Noroît

それでは、この独創的な作品で作家は何を語ろうとしているのか。またそこに現れた日本の風物や人物とは一体何を表しているのだろうか。「直後に」の冒頭において、ブローは次の様に問いかける。

私はここで愛することと書くことの「直後の瞬間」について話したい。いわく言い難いことだが、私はここで9世紀の日本に生きた詩人、小野小町にそいながら語りた。言い伝えによると、小町はその美しさと詩の才能、数々の悲恋によって名を馳せたという。[...] それだけではなく、小町は後年、正体不明のさすらい人となり、両性具有となり、男性詩人に転身したのだという。(Brault, 1981, p.57)

歴史上、謎の多い人物である小町を、真偽のほどは別として、ブローは大胆にも、両性具有で男性へと転身した女流詩人として描き出す。そして、愛することと書くことという実に根源的な問いを、転身という、変幻自在な存在としての小町の逸話に重ね合わせて考察する。一方、「かけらの詩学」においても、ブローは繰り返し、「沈黙」と言葉、「書く」こととは何かという根源的な問いを投げかける。

そして沈黙よ、言葉の目眩のような沈黙よ、連続した連なりの裂け目から、突然、ある言葉から新しい次元の言葉がほとぼしる。(Brault, 1981, p.75)

書くこととは何かという問いが私に重くのしかかる。私を導いてくれる言葉にたどり着くのに、理論武装の（怖れおののかせる）先達などいらぬ。私はさすらい人のように息絶えたい、私の言葉の故郷へと顔を向けて。[...] 親愛なる芭蕉や、敬愛する西行法師のように、吹きすさぶ風雨に身をさらし、ほんやりとした月明りの下、雲間へとひっそりと身を隠すのだ。(Brault, 1981, p.76)

このように、ここではブローが敬愛する漂泊の詩人、芭蕉や西行に自らを投影し、書くことへの問いがさらに突き詰められていく。

詩とは、結局、私の手からこぼれ落ちたところで、おのずから立ち上がる。私など必要ない。[...] 私の友、小町もそう考えただろう。孤独な夜、一人、恋人を待ち続けながら。(Brault, 1981, p.77)

沈黙に向かって書く。友に手紙を書くように。沈黙という解放。(Brault, 1981, p.78)

常に、沈黙の只中で、常に、歌声がたちあがるように。年老いた老婆はしゃがれた声でいうだろう。生と死、二つの言葉は一つであると。(Brault, 1981, p.80)

例えば、私の名前など、このか細い鳴き声など存在しない。なぜなら、あらゆる詩は匿名に向かうのだから。誰か呼んだかい？その笑いはどこから聞こえるのだろうか？壁の向こうから、蟹気楼でもなく、地平線の向こうから。まるで、別の世を生きたようだ。だが、なんと心地良い違和感だろう。(Brault, 1981, p.81)

このように、短いアフォリズムに満ちた言葉が次々と連ねられ省察が深められていく。注目すべきことは、ここで問いかけられていることは、先にみたブローにおける「翻訳の詩学」において追及されていたことと深く共鳴していることである。すなわち、「翻訳の詩学」においても、言葉のはざまにおいて、言語や他者の彼方に創造的な違和感をおびた沈黙が志向され、そこにブローにとっての「書くこと」、詩そのものが生まれていた。

さらに注目すべきことは、この作品で、小町や、芭蕉や、西行という日本文学の作家たちが、転身、あるいは変身、彷徨、漂泊といったイメージを具現しながら立ち表れていることである。

変身や彷徨は、オウィディウス(1981)の『変身物語』に見られるように、ギリシャ・ローマの古典から文学にとっての普遍的なテーマであったと言える。しかし、とりわけ現代においては、依拠する言語の不安定さ、あるいは言語の転移において、変身や彷徨は新たな重要性を帯びたテーマとして浮かび上がってくる。たとえば、インド系アメリカ人の作家で、近年注目をあびているジュンパ・ラヒリ(Jhumpa Lahiri)は、英語表現の作家として成功しながら、その後あえてイタリア語を選択して小説を発表し大きな注目をあびている。そしてそのエッセイにおいて、自らが「変身」のテーマに引き付けられた必然性と強い関心について言及している⁸。

このように考えるとき、*Trois fois passera*において立ち現れる、小町や芭蕉、西行などの日本文学の作家たちとはまさに、ブローにとっての「翻訳の詩学」が希求する、言語と他者の彼方の、沈黙と匿名性から生まれる境地を具現し、表象している存在だといえるのではないだろうか。そして極めて象徴的なこととして、この作品の冒頭には次のような詩が掲げられている。

突然、それは壊れ、
そしてそっと
歌い出す
夜明けの光線が熱を帯びた棒のように
あらわれ
霜が解け私の顔が窓に映る
突然 私から何かが現われる
それは
一本の案山子

(Brault, 1981, p.13)



図2

Collage de Célyne Fortin ©Les Éditions du Noroît

この詩で謳われているのは、憑依、変身のテーマに他ならない。このように、言語のはざまにあらわれた境地で作家が会うのは、自己も他者も越えた、変容と変身がもたらす新しい創造の地平なのである⁹。

おわりに

この論考では、ブローにおける「翻訳の詩学」とは何かについて検証し、

またその詩学と日本文学との関係について、おもに *Trois fois passera* にそいながら考察をおこなった。ブローにおける日本文学の影響を考える上で、今後、連歌の形式に則った E.D. プロジェクトとの共著『変容』の分析と考察は欠かせないであろう。

ジャック・ブローは、ケベックの言語的、文化的状況と、自らの境遇に宿る言語的な不安定さを背景に、自らの言語の外を志向した。そして沈黙と匿名性の彼方に創作の源泉を求め、そこに類まれな寛容さと独自の美学を見出した稀有な作家といえるであろう。

(さなだ けいこ 阪南大学)

付記

この論考は2020年度阪南大学助成研究の成果報告の一部である。なおブローの詩の翻訳と分析にあたっては、『ケベック詩選集』の共同編訳者であった故・立花英裕先生から生前、多くのご教示を頂いた。ここに記して御礼申し上げます。

注

- 1 ジャック・ブローについての詳しい解説は、立花・真田編訳(2019)を参照。『ケベック詩選集』ではブローの初期の代表的な作品「亡き兄と祖国に捧げる組曲」や『はかない瞬間』からいくつかの詩編を訳出している。ブローは詩人としてだけでなく、小説、戯曲、文学批評など多数のジャンルも手がけ、とりわけ優れたエッセイストとしても知られている。なお出版された唯一の小説『煩悶』(*Agonie*, Brault, 1985)は、イタリアの詩人ウンガレッティの一片の詩の翻訳の解釈とその謎解きをプロットにした思索的な物語で、カナダ総督賞を受賞した。
- 2 ブローの作品は、ケベックやカナダにとどまらず、フランスをはじめとするフランス語圏全般において研究対象となっている(Suchet, 2017など)。日本におけるブローの詩についての研究には、真田(2007, 2012)などがある。Sanada(2018)では、比較文学のアプローチからブローの作品における日本文学の影響について分析を行っている。
- 3 ここで述べる「翻訳」とは、翻訳行為そのものと翻訳された文学作品の両方を意味していることに留意されたい。
- 4 ケベック文学において「翻訳」研究は盛んで、シェリー・シモンの他にも、

パトリシア・ゴブー (Patricia Godbout)、ジュディス・ウッズワース (Judith Woodsworth) などの気鋭の研究者が輩出している (例えば、Godbout, 2005; Delisle et Woodsworth 2014)。

- 5 シモンは、モンリオールと翻訳との関係にも注目し『横断する都市モンリオール-翻訳をめぐる文化史』(Simon, 2008)を上梓し、ここでもブローの作品を取り上げ詳しく分析を行っている。
- 6 ブローの翻訳詩集『東西南北からの詩』はすでに多くの研究者によって注目され検証されてきた (Audet, 1975, Simon, 1994, Suchet, 2017 など)。特にブローによるアットウッドの詩 *Axiome* の翻訳は多くの専門家によって取り上げられ研究の対象となってきた (Simon, 1994, Folkart, 2007, Suchet, 2017 など)。
- 7 *Trois fois passera* は、この論考の序文 (はじめに) において『三度通れば』と日本語に訳出した。この論考では原則として、フランス語による本のタイトルは、初めは日本語とフランス語の両語で表示し、その後は日本語タイトルのみを表示しているが、この作品に限っては、フランス語タイトルのみを表示する。その理由としては、日本語タイトルにおいて *passera* を便宜的に「通れば」と訳出したが、ここでの動詞 *passer* には、「通る」の他に「移る、渡る、移ろう、変化する」といった、ブローの詩学に呼応する多義的な意味が込められていると考えるからである。このようにフランス語タイトルをみの表示は、この動詞が孕む重層的なイメージを喚起する意図による。
- 8 ジュンバ・ラヒリは、その著書『別の言葉で』(ラヒリ、2015)の「変身」と題された章で、「変身は暴力的な再生のプロセスで、死であると同時に誕生であり、[...] 芸術の力とは、わたしたちを目覚めさせ、衝撃を与え、変化させる力」に他ならないと述べて、「変身」のテーマの重要性を指摘している。
- 9 ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) は、優れた翻訳が、あらゆる言語の基底となりうる、言語のはざまの、言語を越えた「第三の言語の輪郭」の出現を導くと示唆しているが (Benjamin, 1971)、ブローが *Trois fois passera* においてたどり着いた地平も、自己の言語でも他者の言語でもない、自己も他者も通り抜け、移り変わり、変容した先にある第三の境地であったことは興味深い。

参考文献

- AUDET, Noël (1975) Poèmes des quatre côtés de Jacques Brault. *Voix et Images*, vol. 1, n° 1, pp.131-134.
- オウイディウス著、中村善也訳 (1981) 『変身物語』上下、岩波文庫。
- BENJAMIN, Walter (1971) « La tâche du traducteur », traduit par Maurice de Gandillac, *Mythe et Violence*, Denoël, pp.261-275.

- BRAULT, Jacques (1975) *Poèmes des quatre côtés*, Le Noroît.
- (1981) *Trois fois passera*, Le Noroît.
- (1984) *Moments fragiles*, Le Noroît.
- (1985) *Agonie*, Boréal.
- (1986) *Poèmes I (Mémoire, La poésie ce matin, L'en dessous l'admirable)*, Le Noroît/La table rase.
- (1989) *La poussière du chemin*, Boréal.
- (avec Blodgett, E.D) (1998) *Transfiguration*, Le Noroît/BuschekBooks.
- DELISLE, Jean et Judith WOODSWORTH (dir.) (2014) *Les traducteurs dans l'histoire*, 3^e édition, Presses de l'Université Laval.
- FOLKART, Barbara (2007) *Second Finding: A Poetics of Translation*, University of Ottawa Press.
- GODBOUT, Patricia (2005) « La traduction littéraire au Québec : de la pratique à la théorie », *Documentation et bibliothèques*, vol. 51, n° 2, pp.89-96.
- JAKOBSON, Roman (1959) « On Linguistic Aspects of Translation », dans Ruben Arthur BROWER (dir.) *On Translation*, Oxford University Press, pp.232-239.
- ラヒリ、ジュンパ著、中島浩郎訳 (2015) 『別の言葉で』新潮社。
- 真田桂子 (2007) 「ケベック詩抄訳 ジャック・ブロー 『はかない瞬間』」『阪南論集 人文・自然科学』第42巻第2号、49～60頁。
- (2012) 「ジャック・ブローにおける内的流浪と記憶」『カナダ文学研究』第20号、39～48頁。
- SANADA, Keiko (2018) « Transformations d'esthétiques : échanges interculturels entre œuvres littéraires japonaises et francophones : À travers des analyses d'œuvres de Daigaku Horiguchi et de Jacques Brault », *Revue japonaise de didactique du français*, numéro spécial : Fédération internationale des Professeurs de Français, Actes du IV^e Congrès régional de la Commission Asie-Pacifique, http://sjdf.org/pdf/cap2017kyoto_actes.pdf.
- SIMON, Sherry (1994) *Le trafic des langues: Traduction et culture dans la littérature québécoise*, Boréal.
- (2008) *Traverser Montréal: Une histoire culturelle par la traduction*, Fides.
- SUCHET, Myriam (2017) « Jacques Brault et la nontraduction, un Unland original », *TRANS- (Online) Séminaires*, <http://journals.openedition.org/trans/1646>.
- 立花英裕・真田桂子編訳、後藤美和子・佐々木菜緒訳 (2019) 『ケベック詩選集—北アメリカのフランス語詩』彩流社。